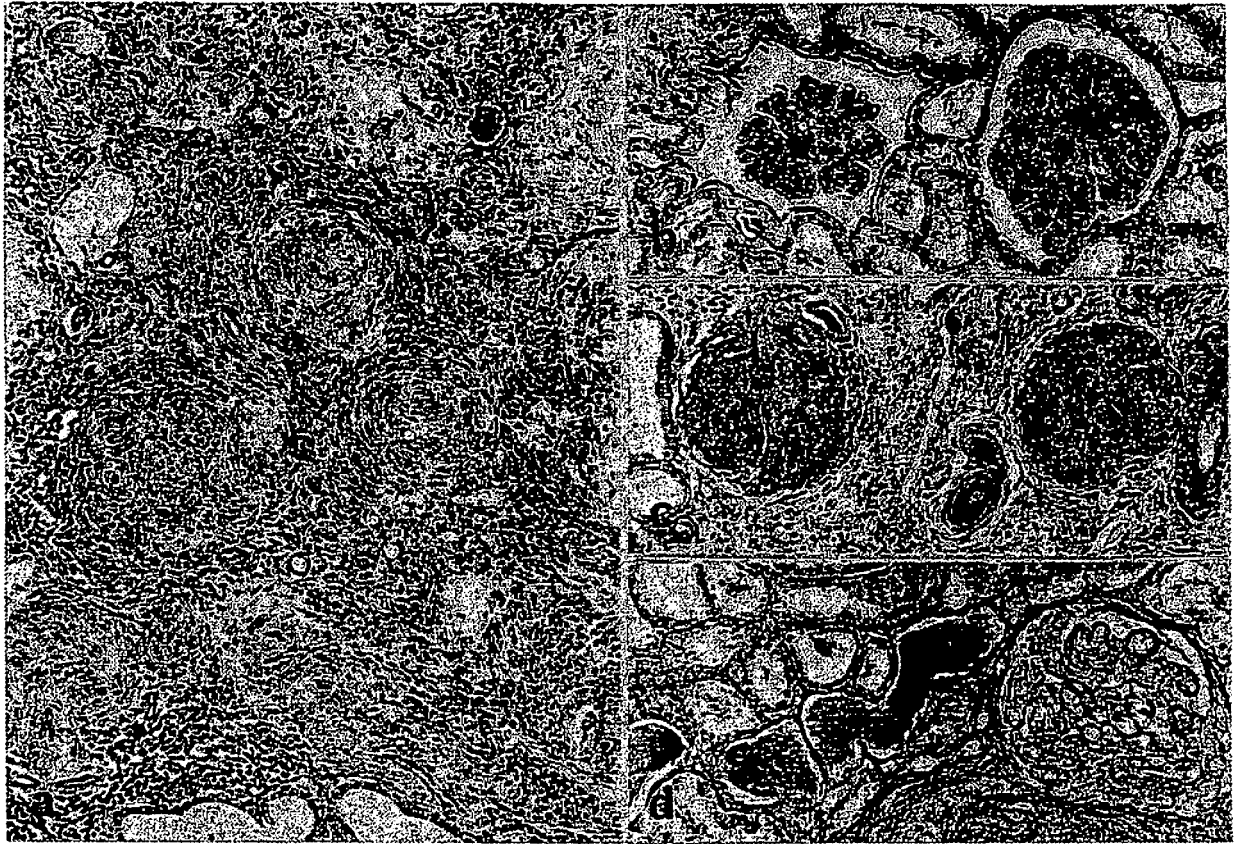


山羊の腎臓

農林省家畜衛生試験場伝貧部病原病理研究室出題 第15回獣医病理学研修会標本 No.227



症例は千葉市内に飼育されていた体重約 100 kg の雄のザーネン種。

臨床：1974年6月16日発熱（40℃以上），起立困難となり抗生剤（テラマイシン，ペニシリン）の3日間連続投与により解熱し一旦食欲回復。7月1日急激に元気消失，食欲不振，起立不能に陥り右横臥，頸部伸長。7月3日殺。

血液検査：WBC 14,600，RBC 448万。Hemogram：Bas. 0%，Eos. 2%，Neut. 70%，Lymph. 23%，Mon. 5%。

細菌検査：脳幹部，延髄から *Listeria monocytogenes* 分離。

剖検所見：皮下乾燥，脂肪織に乏しい。肝：帯褐紫色，光沢を有し小葉像明瞭。脾：リンパ濾胞はケシ粒大に認められ赤脾髄や、軟。脾材は明瞭。腎：や、腫大。包膜の剝離困難。包膜下実質には微細ないし粟粒大灰黄白色不整形斑が密在しアバタ状，剖面では三層の境界が不明瞭で灰白色ないしは帯黄色巣が小斑点状あるいは縞状に多在した。中間層から髓質にかけて透明水様液をみたます粟粒大ないし小豆大の嚢胞がみられ，とくに髓質では大きさと数を増しており，透明感のある硬固な結石を入れるものもあった。尿管は拡張し粘膜は充血性。

病理組織学的所見：間質および小動脈周囲に増生した

膠原線維により髓放線状に認められる部分が多数存在し尿細管の嚢状拡張と萎縮，および腔内にPAS陽性尿管柱などが認められた。しかし病変の主体は種々な段階的变化をしめす糸球体にあった（写真a~d）。

髓放線様構造を呈した病巣部の腎小体には輸入動脈硬化が認められ（写真a），Mesangium細胞の増殖（写真a，c），Wire-loop病変，Bowman嚢上皮の増殖と嚢の線維性肥厚および糸球体硬化（写真a）などが存在した。そのほかの部位の糸球体には嚢の拡張，細胞増数（写真b），Fibrinoid変性，Wire-loop病変（写真d）などが認められた。かゝる変化は前記髓放線様部に存在した糸球体病変と同質とみなされた。また髓質では著しく結合織が増殖し，間質の巾が増していた。この様な部位に分布する尿細管は拡張し管腔内にエオジン染色性物質を容れ，しばしば嚢胞形成に至っていた。

一方本症例の脳幹部にはリステリア脳炎が存在した。肝，小腸に分布する中・小動脈に内膜から中膜にかけてFibrinoid変性が存在し，まれに結節性動脈炎が認められた。

組織診断：細動脈硬化を伴った慢性増殖性糸球体腎炎とした。間質結合織の増殖および嚢胞形成などは悪性腎硬化を思わせる所見であった。

a：HE×100 b：HE×100 c：PAS